

返し長期にわたり訪問し、言葉も含めて現地に精通した研究者の多い著者たちであれば、もっと違った論述もできたのではないか。そうしてこそ初めて、日本と欧米の歴史研究や計量研究やエスノグラ

フィによって埋め尽くされた「教育社会学」の世界に、真の衝撃を与えることができたのではないだろうか。

◆A 5判 278頁 本体4000円
明石書店 2003年12月刊

■ 書 評 ■

小林順子・関口礼子・波田克之介・小川洋子・溝上智恵子 [編著]

『21世紀にはばたくカナダの教育』

神奈川大学 河上 婦志子

カナダはモザイク社会であるといわれる。多種多様な人種・民族集団が、それぞれの文化の固有性を保持しながら全体として調和を生み出していることを指すのだという。多種多才な研究者が、大きさ、形、色合いの異なるさまざまな破片を焼き上げて造ったモザイクのような本書はまさに、カナダの教育を紹介するのに格好の著作だといえる。

教育行政を州の管轄事項としているカナダの教育の全体像を描くことは容易でない。なぜなら州の教育制度成立の歴史的背景が多様である。政権政党によって政策が異なるうえ、政権が交代するたびに教育政策も変わる。先住民や民族集団・言語集団の構成が州によって異なり、財界や組合からの教育に対する要求も、産業構造の違いを反映して一様でない。

本書は、このように多様性に満ちたカナダの教育の最前線を可能な限り幅広く紹介することを目的に、若手からベテランにいたる総勢20名におよぶ研究者が、研究業績と知識の蓄積を結集し新たな情報収集活動を行って編んだ力作であり、

2003年度カナダ首相出版賞の受賞も肯える好著である。

第1部では、カナダを構成する10州と3準州からブリティッシュ・コロンビア、アルバータ、オンタリオ、ケベックの4州を選び、それぞれ1章ずつを立てて初等・中等教育制度やカリキュラムの改革動向を紹介している。

カナダ全体の人口の85%が居住し、OECDの国際学力評価においても高い得点を挙げているこれら4州の教育政策の現状を、さまざまな新しい資料を駆使して描き出すことによって、経済のグローバル化や国際競争の激化を理由に、学業成績重視・職業教育志向・アカウンタビリティの確保を柱にした改革がカナダでもまた推進されていることを明らかにしている。カナダですでに実行に移された標準テストの導入とその公表、中等教育における職業準備教育の重視、スクールカウンシル制度の実施、生徒の地域参加活動の義務化、教員養成制度の改革などの成果と問題点は、日本における教育改革を考える際に大いに参考になるに違

いない。

カナダの公式の教育政策は政権交代によって変化するが、それまで主流であった教育方針や課題は、その政権を支持しない人々の手によって、また政権とは相対的に独立したNPOなどによって担われ維持され続けていく面もある。政策が現場の実践者の思いや評価と異なる場合も多い。「現場の声」の紹介やケース・スタディ的なコラムを採用している章もあったが、政府が発行した公式文書の紹介だけに終始している箇所が見受けられたのは残念である。また州ごとに項目構成が異なっていて、たとえば成人教育や教員養成に触れている章といない章があったが、検討項目が統一されていた方が読みやすく全体としての理解も深まったように思われる。

第2部ではカナダの特色ある教育とその動向がテーマごとに紹介されている。各テーマを専門とする著者によって書かれていて、鮮明な問題意識に支えられた読み応えのある論文が多い。

第1章ではすべての州・準州のスクールカウンシルの状況が説明されている。「その多くは助言機関ではあるものの、学校的意思決定の公的なプロセスの中に位置付けられており、校長の選任過程への参与や校長あるいは教育委員会がスクールカウンシルからの提言に対し、どのような対応をとったかを報告することを義務づける」など、日本の学校評議員制度とは「似て非なるもの」であるという指摘や、中等学校段階では構成メンバーに生徒代表が含まれることなど、興味深い記述に満ちている。

第2章では、社会人に対する学習機会の展開が述べられている。政府が人材資源開発の視点から職業技術の訓練や教育に力を注いでいる一方、NPOや市民グループが地域社会づくりや自己開発を目的とする独自の活動を行っているという。労働者の中に入り込んで識字教育・基礎教育を行う「フロンティア・カレッジ」、1980年代後半に生まれた「レイジング・グラニーズ（怒れるおばあちゃん）」たちのユニークな運動など、カナダ教育の大切な部分が市民によって支えられていることがわかる。

第3章では二言語教育の実際について紹介されている。とりわけ小学校段階からの第二言語教育は、教育特区で小学校に英語教育を導入しようとしている日本にも参考になる。フレンチ・イマージョン（フランス語漬け：ほとんどすべての授業をフランス語で行う）教育に関する調査が見出した、母国語以外の言語で基礎的な認知能力の訓練を行うことが脱落者を生み出しているという事実は、母国語の能力を十分に習得し認知能力を身につけたうえでの第二言語教育が必要であることを示唆している。

第4章ではIT教育について、メディア・リテラシーや図書館利用教育におよぶ広い射程から論じられている。とりわけコンピュータ利用上の倫理教育や、生徒の人権・人格権の保護に関する記述は、私たちにとっても重要な課題を示している。

第5章・第6章では、カナダの特色である多文化問題や先住民教育が取り上げられ、これらの教育政策の変遷と、社会

の平等を実現するために多くの資源が投入され配慮が払われていることが、豊富な資料によって紹介されている。

アメリカ合州国と長い国境を接し、北米自由貿易協定以降ますます合州国の経済的影響を受けやすくなっているカナダだが、それゆえにこそ合州国とは異なる独自の教育政策を迫及しようとしてきた。その意味で、過去のものになったとはいえ、生徒—教師—学校—成人教育センタ

—教育委員会—教育省の順で構成されたケベックの「新公教育法」や、多文化主義に立ったオンタリオの公正教育について、いま少し紙幅が割かれていればと思う。とはいえ本書が、カナダの教育を理解するための最適の入門書であることは疑いない。

◆A 5判 320頁 本体2,800円
東信堂 2003年9月刊

■ 書 評 ■

竹内 洋 [著]

『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』

東京大学 佐藤 香

著者の言葉を借りれば、本書は教養主義への鎮魂曲（レクイエム）として位置づけられる。教養主義とは旧制高校を典型とする学生文化であるとともに、エリート層文化でもあった。現在では失われてしまったこの教養主義の軌跡を、近代日本の歴史的文脈のなかで描くことが本書の主題である。

本書の構成にふれておこう。まず序章で、自らの個人的体験と重ねつつ、うへの主題について述べる。続く第1章では、旧制高校文化として高踏的・閉鎖的であると考えられがちな教養主義が、実は、社会の変化と深く関連していたことを明らかにする。教養主義は、時代とともに、大正教養主義→マルクス主義→昭和教養主義とダイナミックに変化してきた。その軌跡が、教養主義と不可分であった読書のデータや、さまざまなエピソードを

まじえて語られる。

第2章では、最後の輝きとでもいえるべき1950年代の教養主義が描かれる。この時期の教養主義の特徴を明らかにするために、著者は石原慎太郎に着目する。それは、「石原慎太郎の「知的なものに対する」、「胸のすくような徹底した侮蔑」「生理的嫌悪」にこそ、近代日本の教養主義とはなんであったかを考えるための大いなる手がかりがある」(p.82) と考えるからである。ここでいう石原慎太郎の侮蔑の対象になったのは、読書が示すような教養主義の表層というよりも、教養主義の基層であり、深層でもある教養主義者のハビトゥスであったというのが著者の仮説である。

このハビトゥスとは、どのようなものであったのだろうか。第3章では、日本の教養主義の奥の院とでもいえるべき帝大